

Title	史前學研究史
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.4 (1928. 12) ,p.107(573)- 157(623)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281200-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史前學研究史

其 一 序 論

史前學 (Præhistorie) なるものが、如何にして生れ出で、而して如何なる發育經過を以て今日に達したか、其研究歴史を述べて、先人の奮闘を偲び、又或る意味では將來にも備へ、且つ研究方向をも併せ考へたいと思ふ。

この史前學なるものも、實の處甚だ若い學問である。歐洲でこそプレ・ヒストリーはまだまだ古いが、日本では久しく先史考古學と呼ばれ、史前學なる文字は、私の稱し始めた程、それ程に若いのである。或る意味に於てはそれが科學 (Wissenschaft) として今日でも、一部の學者間に其成立に就いて、尙未だ疑の目を以て見るものすらある。又若き學徒の間に屢々論議せらるゝ問題も藏しても居る。然しそれ等の内容に於ては、更に更に研究を要すべき幾多の事項を解決せねば、史前學の輪廓が明瞭に寫し出さるものでない。従つて或る所まで研究が濟まぬ間は、史前學は、單に人類の有史以前の研究であると漠

然と云うて置くより外はない。私は史前學の一學徒として史前學に對し盲目的に禮讃しようとするのではない。其缺けたる所は、充分認めもするが、主張すべき正しきものが存するならば、それに向うて直進することも、亦敢て辭さない。たゞ私共の立場は寧ろ史前學に於ける研究にあつて、その成立、不成立の問題ではない。今日の史前學としては、只今研究せねばならない幾多の重要問題があり、特に日本史前學に於て然りである。然しこの諸問題も研究を重ねぬ以上、容易に片付け得るものでなく、他の一面に於ては、史前學を正視せねばならない。誤解、曲解も直さねばならない。従つて日本史前學に於ける重要研究の外、史前學の内容を明にする基礎史前學(Grund-Præhistorie)も亦、今日大に必要を感じる。此の様な現況に於て、一通り史前學として經來つた有り様を回顧することも、史前學を了解する一場面であること、信ずる。勿論史前學研究史は、單なる過去の經過に過ぎないと言はゞ言へるかも知れないが、更に翻つて其經過を見來ると、尠くとも吾等學徒には、或る暗示を與へらるゝものがある。今これを順次述べて行かう。

其二　黎明以前

史前の研究は、今日の史前學がとつて居る當時の事實事物の實際を直接研究するのみではない。他に言語學、神話學、比較土俗學等、色々の方面から有史以前は、夫々或る所までは考へ得る。然し今述べ

ようとして居る所の史前學研究史なるものは、かうした廣い範圍に亙つて綜合的に述べて居るのではない。所謂科學的研究の範圍にある狭い部分のみである。従つてこれを時と云ふ目で見れば、僅々今日より二百餘年の問題であり、又空間から云へば、歐洲を主體としたもので、日本の内容などには殆んど觸れて居らない。特に日本の如きは、今日未解問題の外、主體が直接現存諸大家にあるから及ぼす所深いものがあるので、こゝでは省略することにする。

又文化の進展は、時と所により一樣でない。之は有史以降と同様である。従つて某史前文化に對し、其比隣の高等文化民が、これに關する記録を遺すことも尠くない。即ち其民それ自身には、未だ史前文化である、文字記録を存せずとも、他の高等文化民の記録から、或る所までは、史前の研究が出来る。又それが科學的研究に對する直接間接のヒントを與へることがある。従つて史前研究の一部には、かうした研究方法、即ち文献よりする史前研究も、或る意味に於て成立し、且つ容易にこの方法を考出することも出来る。例へて見たならば、ギリシアのヘロドウス、カルダゴのハノンの遠征記、ローマに於けるシーザーの遠征紀行、或は日本を説述して居るので毎度問題を醸する魏志、東夷傳等、色々の古文献を辿るに於ても、研究に分野を見出し、且つ此の如き記録を作出した時代竝に、文献よりする研究史等も存するけれども、私の述べんとする方面とは、稍道を異にする所があるから、これ等の内容にも今回は觸れて居らない。

この研究史として述べんとする主體は、黎明以後にある。従つて黎明以前の先覺者に就いては、夫々其卓見には敬意をばらふが、單に黎明に導かんとする導火線に過ぎない程度に止めて置く。

有史以前なるものが如何であつたかに就いての考は、時と所により差はあるけれども、輓近科學の進歩するまでは、多くは神話、宗教等と密接なる關係のもとに、人間は神の造らせ給うたものとの考は、洋の東西を問はず存在し、且つ有力なるものであつた。これに對し、一部では遠くギリシャの哲學者 Epikuros (340—270.V.C.) の如きは、史前に關する考察を有して居つたが、單なる考察に止まるもので

ある。其れ以降、十九世紀に至る二千餘年、かうした先覺者を求めたなら隨分數多いことと思ふが、これ等の詳しい穿鑿は他日に譲り、話をローマ時代、しかも飛び飛びに持つてくる。文末年表に掲出して居る如く、第十五世紀、畫家として有名であるレオナルド・ダ・ウキンチ (Leonard da Vinci, 1452—1519) の如きは、早くも地質に層位あることを知つた如き、科學發生の先驅をなして居る。第十六世紀に入つて特に着意せらるゝ人はメルカチ (Michel Mercati, 1541—1598) である。彼はローマ法王廳に仕へて居つたが、既に石斧に止まらず、石小刀、石鏃等の石器の外、一部の骨角器まで知つて居り、且明確にこれ等の諸器は、文化進まず金屬使用を知らなかつた時代の所産であると云うて居る。この様な時代一般から飛び離れた卓見の如きは、當時社會一般の趨勢上容易に取入れられない。従つて後繼者も出來得ないから彼れの卓見も數世紀の間、地下に眠らざるを得なかつたので、今日に復活し、一大先覺者として史

前學徒の敬意を表する所となつて居る。

この十六世紀社會一般の狀態は如何であつたか。メルカチの卓見と比較する爲め、こゝに一挿話を紹

介しやう。處は當時の文化中樞から稍々遠ざかるドイツの片田舎、

Kragenfurt なる小市の郊外に於て計らずも、洪積層中より厚毛犀

(*Rhinoceros tichorhinus*) の頭蓋(第一圖)を發見せられた。勿論掘り

出した人々も、近處の者もそれが何物であるかを知らない。只怪物の

骨として驚き恐れるのみである。やがてこの報、町に達するや、町は

時ならぬ騒ぎとなり、博識なる古老が相集つても、誰一人それが何物

たるかを知らない。衆口は期せずして龍(Lindwurm)となし、萬一の

復活を恐れて堅く市廳内に鐵鎖を以て縛着密閉した。而して後にはこ

れにちなんだ巨人が龍を撃つた記念碑までが設立せられ、今日尙この

町に往昔を物語るものがある。この犀君、哀れ罪なき禁錮の身となつ

て數百年、人々は恐れて近よらず、漸く一八四〇年、Franz Unger に

より正しき名を與へらるゝと共に、青天白日の身となつた。これが兎

に角同じく第十六世紀の出來事であり、メルカチの考と比較して見たなら、彼れの卓見が容易に考へ得



第一圖 ドイツ Kragenfurt 出土の犀頭骨
第十六世紀に龍と間違られたもの(O. Abel,
V.T-M-S-A. より)

よう。

これが十七世紀を過ぎて十八世紀に入つても、未だこれと云ふだけ直接史前學上、目覺しい活動をするものはない。今日有名な南獨 *Württemberg* の *Kunststätt* 發見の古人類頭蓋如きも既に古く一七〇〇年に粘土層中より多くの洪積動物と共に發見せられたが、人々は一向氣も付かず、これ亦百餘年間、空しく *Stuttgart* 博物館に放置せられてあつたのである。この當時社會一般は十六世紀と大差はない。人々の多くは、人類の祖原はアダムとイブであり、神の造り給うたものとなし、さなくば色々荒唐無稽の説話を信じ、一方遇々の機會に石斧其他人工顯著なるものを發見した場合は、直に雷斧 (*Donnerkeile*) となして怪しまなかつたもので、雷斧に關した記録は遠く十二世紀にも遡り得るが、下限に於て今よりたつた二百年前、即ち一七二三年には、巴里大學に於てすら、當時米國より送り來つた石斧其他を、簡單に雷斧と片付け、一七二六年にはスキスの博物學者 *Johann Jakob Scheuchzer* は鯢魚の化石を以て聖書にあるノアの洪水より以前の人類 (*Homo diluvii testis*) と命名發表して世を驚かした程である。

然し社會一般は兎に角、一方では色々今日の諸科學が萌初めては居る。特に十八世紀中頃より自然科學方面では、動植物等の泰斗リンネ (*Karl von Linné*, 1707—1778) 出で、生物分類を試みたり、ブルメンバッハ (*Johan Friedrich Brumenbach*, 1732—1840) は人類相互間に於ける比較を試み、同様にゾンメリング (*Samuel Thomas von Sommering*, 1755—1830) と亦人種間の相違に着眼する等、本世紀末に

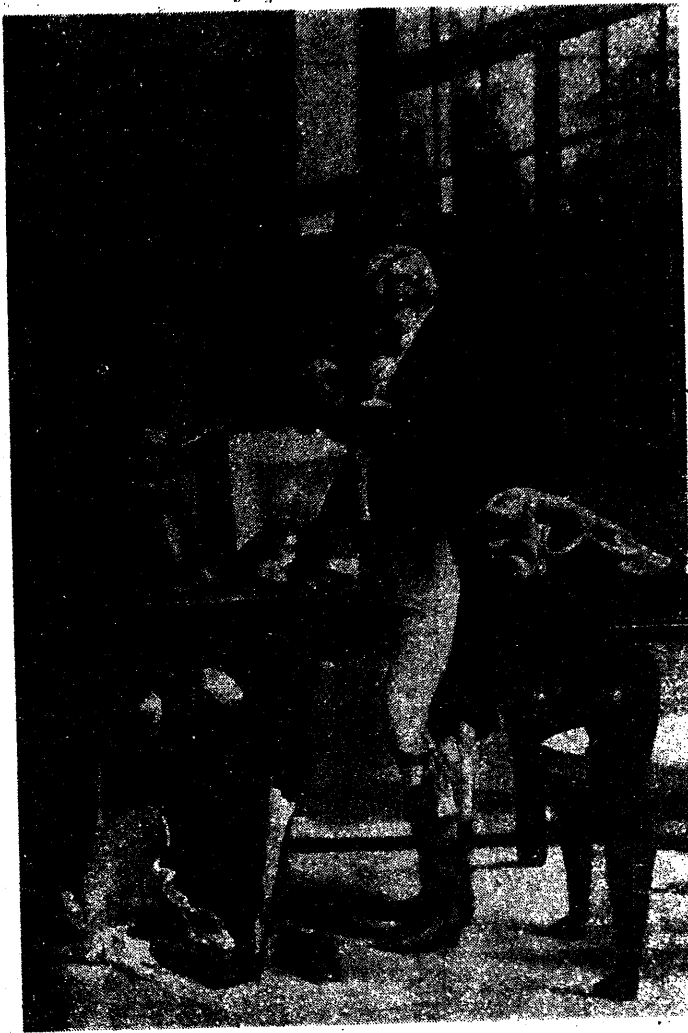
は、こうした科學方面が、黎明に達しつつある。

考古學に於ても、ウキンケルマン (Johan Johachim Winkelmann 1717—1768) 出で、イギリス、ローマ等の實物研究をなして、考古學の研究方法を以てし、今日所謂古典考古學 (Classische Archæologie) の基を開いたのである。

この時代既に史前遺物に關する發見も亦、漸次多くなりつつある。一七七四年には、ドイツ Fränkische Schweiz に於て、牧師 J. F. Esper は洞窟粘土中より洞熊其他の洪積動物と者に古人類の下顎其他を發見してこれを Nachrichten vom Zoolithen unbekannter Vierfüßiger Tiere und den sie enthaltenden Gräbern in Baireuth. Nürnberg. 1774. として報告し、英國にても一七九七年 John Frere は Suffolk 州の Hoxne に於ける粘土坑の深さ約十二呎の所から多くの燧石器を出土し、これに對し金屬を未だ解せざる史前人類の用ゐたものであらうと述べたが、前者と共に、世人の注目する所とならずに終つたのは、時勢とは云ひながら氣の毒なことである。然しかうして段々と史前遺物の發見が増して行くに従つて、これに對する知識慾は、從來の見解のみで満足が出来ず、より科學的にこれを知らんとする傾向は、より濃厚となり、史前學の曉鐘は將に鳴響かんとしつつある。

其三 黎明期

黎明期と稱したのは、後述して居るトムセンの史前三大編年を行うた前後、即ち十九世紀の當初より、ブーシェ・ド・ベルトの舊石研究を経て、大約ラポックの新舊兩大期區分竝にモルチエの舊石編年までの間を云うて居るので、特にトムセン三大編年以前は、前述してきた黎明以前の繼續に過ぎないのである



第二圖 キュビエーの古生物研究
(H. Kraemer, Weltall und Menschheit より)

が、直接トムセンの三大編年を生む、四圍の空氣から見て行く。十八世紀末より十九世紀當初に於て、スミス (William Smith, 1769—1839) により初めて地質學 (Geologie) なるもの唱道せられ、キュウビエー (Léopold Chrétien Frédéric Dagobert Cuvier, 1769—1832) 其所論災

厄説 (Katastrophentheorie) を以て一世を風靡した。彼は過古に於て幾度か地球變動により古き地層中に其當時の生物殘骸を止めたるものとなし、古生物學方面竝に動物比較解剖等に互り大なる研究をなし (第二圖) ラマーク (Jean Baptiste Antoine Pierre Monet du Lamarck, 1744—1829) は、多く植物竝に無脊椎

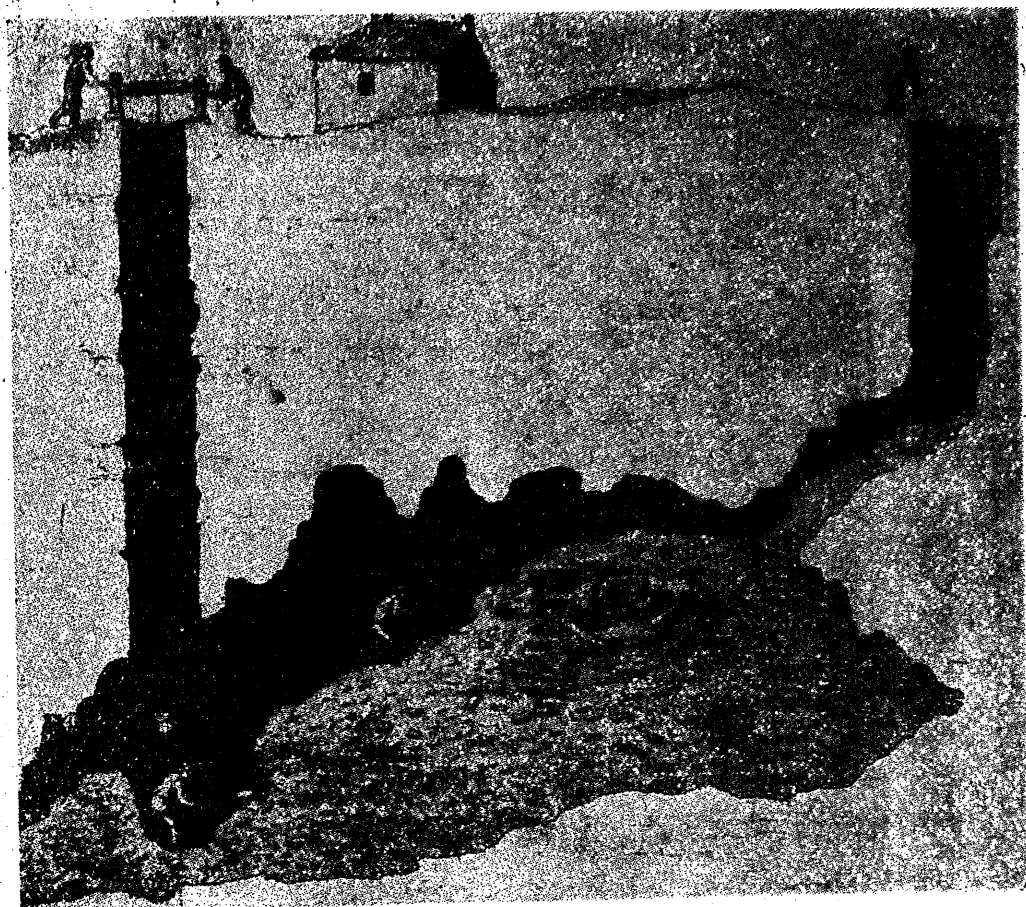
動物に關して研究し、終に進化論を稱ふるに到つて、キュビエの災厄説と正面衝突を起した。然し其當時の社會一般に於ては、災厄説は特にノアの洪水の如き、それが學說上にも聖書と背馳しないと云ふ強い背景を有し且つ社會上にも聲望あるキュビエの所論であるに對し、ラマーク説は常に南風競ず、其例證の如きも、個々の動物に精通して居るキュビエに説破せられ、純正なる學說を有しながらも、



第三圖 進化論の先驅者ラマーク(1744-1829)
(H. Kraemer, Weltall und Menschheitより)

眞理の凱歌を唱し得ずして、ラマークは貧困の内に失明し、纔かに愛嬢 Cornélie によつて慰安を得つゝも、學說を固持し、百年の後に知己を求めて悲慘なる生涯を終つて居る(第三圖)。然しラマークは今日に生き、當時の勝者キュビエの如きは、ラマーク歿後一年、即ち一八三〇年には早くも英國の地質學者ライエル (Charles Lyell, 1797-1875) によりて災厄説を破られて居る(1)。ライエルの説く所は、「地質の變動は突發的のものではなく、緩慢に長時日を要し、この間に生物の優勝劣敗があつて、この結果、漸次深く埋没して化石となつたものである。」との説で、ノアの洪水如きも無條件で過信し得ざるに至つてきた。此のノア洪水説が確固として動かぬ以上は、直接有史以前の

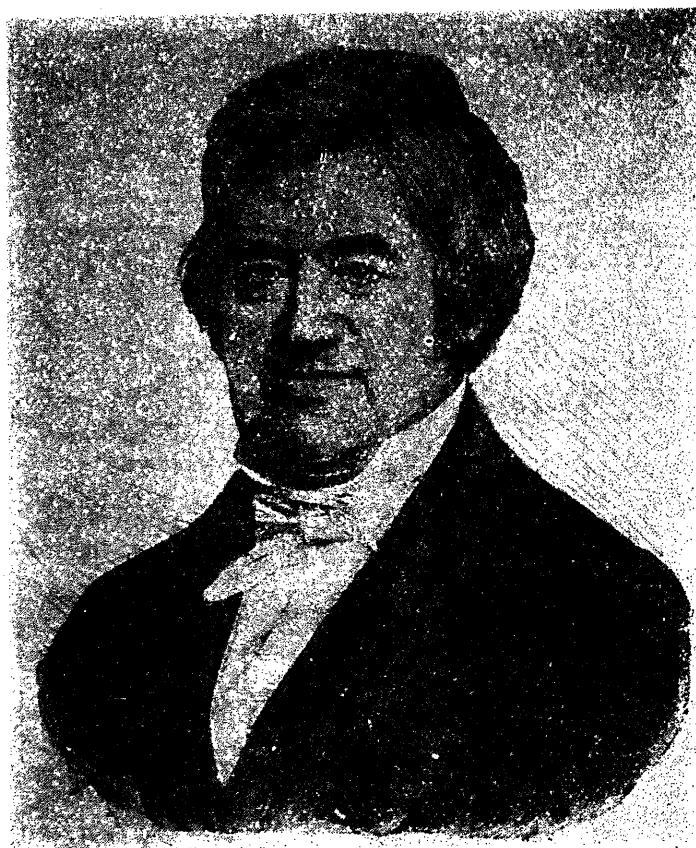
研究は容易に進展し得ない。それが以上の如く化石の實在、乃至は進化論如き研究によつて漸次其進路が開かれつゝある。



第四圖 南英に於ける古き洪積發掘圖
原圖 (一八二二年 Buckland „Beliquiae diluvianaee „)

この頃直接史前學的資料の發見も漸次増しつゝある。一八二〇年には南獨
Thüringen の Köstritz に於て男爵 von
Schlotheim は化石人類の頭蓋及び其他若
干部分を發見し、且つこれが古人骨であ
る可きことを公表し⁽²⁾、二三年にはドイ
ッ・バーデンのラール在の Schutterthal に
於て Ami Boné (1794—1881) は黃土層
中より古人骨を出土せしめ⁽³⁾、英國に於
ては、William Buckland は一八二二年
洪積と沖積の區分をなし、且つ洪積動物
を發掘研究して居る(第四圖)。二四年に
同國南海岸の Torquay に於ける有名なる

Kent's cave を Northmore は發掘調査し其翌年には牧師 Reverend J. Mac Enery これに加はり、赤色洞窟粘土層中より、マンモス、厚毛犀、洞熊、野馬其他の遺骨と共に人工を加へたる燧石器を發見して居る。佛國に於ても一八二七年 Paul Tournal (藥劑師にして地質學者、且つ南佛 Aude 縣 Narbonne 博



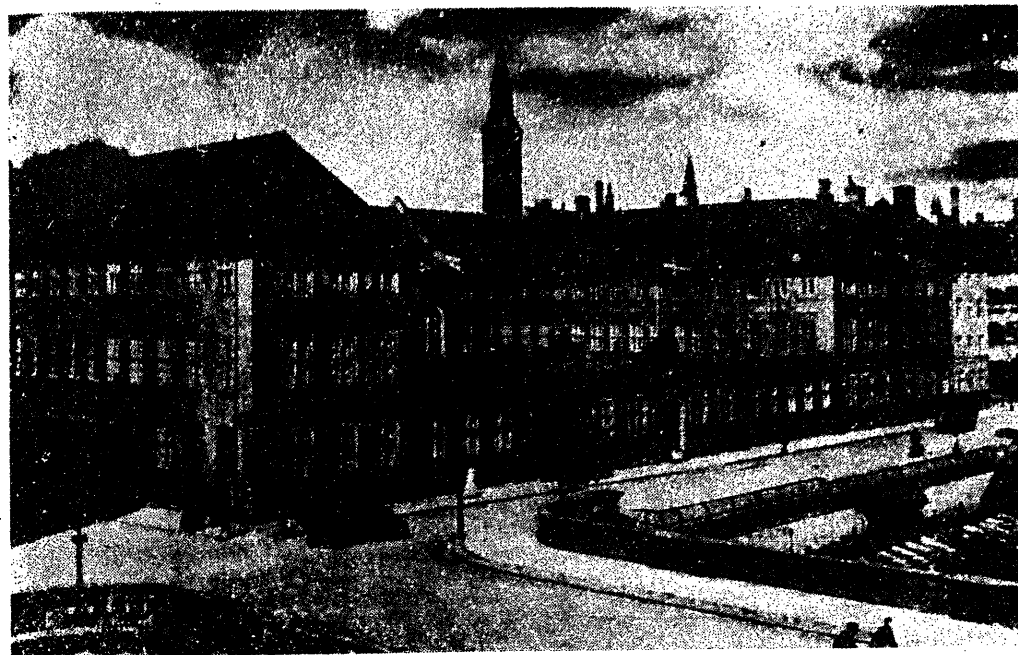
第五圖 トムゼン六十一歳の肖像
(S. Mueller, N-Aより)

物館の管理者)は Bize に於ける二個の洞窟を發掘し、洞窟粘土層中より多くの洞熊、野馬、馴鹿、野牛其他の遺骨と共に古人骨を發見し、二九年には Jules de Christol は Poudres の洞窟より古人骨と共に、犀、洞ヒエナを調出し、E. Dumas は Gard 縣 Sommières の Souvignargues 洞に於て、Dr. Pitore は Hérault 縣 Cesseras の Fauzan に於て、共に古人骨を發見して居る。此の如く英、獨、佛各地に發見せられ、其資料類例の増加は、史前學發生の基礎となり、他に一八三二年には巴里博物館解剖學に於ては、新に人類自然史 (其後人類學、Anthropologie と改めらる) なる新講義を設け Marcel de Serres 當初の教壇に立ち、

デンマークには北歐考古學及史學年報 (*Aarbøger for Nordisk Oldkyndighed og Historie*) を發刊せられ

一般の大勢は恰も深夜の夢を破つて、曉鐘將になり響かんとしつゝある。

終に時はきた。紅さした彩雲と共に初光を見るに到つた。一八三六年デンマークの大トムゼン (*Christian Jurgensen Thomsen, 1788—1865*) (第五圖) は史前時代を夫々其文化に従つて、三大區分 (*Dreoperiodensystem*) を編設した。即ち文化古きに遡るに従つて鐵より青銅時代となり、更に古く石時代の存在したことを編年區分したのであつて、トムゼンは一八一六年このかたコッペンハーゲン國民博物館 (第六圖) 館長の職にあつたから、この編年に従つて、石、青銅、鐵時代夫々分類して陳列し、其所論の理解を容易にした。この三大時代區分なるものは、當時雜然と考へられて居つた人類過去の過程に對し、整然たる系統の上に、文化進展の



第六圖 コッペンハーゲン國民博物館
中央入口より向つて右が研究室 (或る寫眞より)

基礎原則を樹立したのであるから、この過程上より從來學者を惱ました、史前諸遺物の存在に對する解決の鍵ともなり、これによつて、史前學研究の進歩もより可能となり、終に今日にまで導き得たものである。何れにせよ、既に史前學一般の狀勢は、其黎明に達せんとしつゝあつたとは云へ、この功はトムセンの受くる所であり、以て史前學の開祖とせらるゝ所以である。

北歐に於てはトムセンと相前後して Mecklenburg-Schwerin の Frieirich Lisch 及びスエーデンに Sven Nilson (?...1833) が居つた。前者も一八三七年には、古き時代には各種の文化階梯あることを研究發表し、後者はトムセンにつ先つて、一八三四年、其著 *Entwurf der ältesten Geschichte der Jagd und Fischerei in Skandinavien* に於て、自然民と古代との比較を試み、今日の所謂比較考古學の先鞭をつけ、且つ史前遺物の解明につとめたものゝ、兩者共に明快なるトムセンの三大時代區分の盛名に壓せられて、其功業を傳うるものが尠ない。然しながらニルソンは一八三八年に至つて、其大著 *Skandinaviska Nordens Urinvånare* に於て、始めて *Præhistorie* と稱し、爾後この言葉を以て史前學名とまでなしたことは、史前學研究史上、其名を逸し得ないのである。

北歐に於ては此の如く史前學上の根柢を確立して、史前學上の先進研究の譽を得、恰も暗雲を破つて、朝光新に輝く時に、西歐も亦、稍々遅れながらも曙光を見んとしつゝある。各地の發掘發見に續くに、各種學會等の生るゝものがあり、舊石研究の開祖ブーシエ・ド・ペルト (*Boucher de Perthes*, 1788—1868)

は一八三九年頃より西佛アベビーユ (Albeville) 附近に於ける舊石に對し其組織的研究に着手して居る。一八四六年には、これ亦北歐に於て、デンマークの博物學者 Japetus Steenstrup は北歐氷後期に於ける植物編年をとげて、後年同地方に於ける地質、動物、植物編年等の動機と研究との基礎を作り、延いて



第七圖 ハルスタット文化發生地
スキス Hallstatt 市
(H.obermaier, M-V より)

北歐史前編年に對し自然科學的編年との結合の端緒を作り、史前編年をして其確實性を増大せしむるに到つて居る。續いて一八四六年スキス Salzkammergut に於ける小市 Hallstatt に於て、鐵器を藏し其文化不明なる多數の古墳群を發見した。これが一八七四年ストックホルムに開かれた萬國史前學大會の席上、Hans Hildebrand の提唱によりハルスタット文化と稱せられ、史前鐵時代初期の文化と認めらるゝに到つた(第七圖)。

一八四六年には、ブーシエ・ド・ペルト(第八圖)最初の

單行文獻 *Antiquites celtiques et antediluvienues. Némoure sur l'industrie primitive et les arts à leur origine. Paris.* を發表し洪積期に於ける人類の存在を認め且つその時代は、石器を主用せる原始的な時代であることを高唱した。勿論反對論もあつたが、彼れの研究は、この發表後十餘年、佛國に於ては、

Larte, Gaudry, 英國には Lyell, Falconer, John Evans 等相ついで賛するに及んで、反對論も次第に雲散し、彼をして舊石史前學の祖と仰ぐに到つた。ソーラス (W.J. Sollas) の如きは、彼の功業を紀念すべく、彼の多く研究した前期舊石時代の代表的遺物である握り槌 (Coup de point (F), Faustkeile (D))

はよろしく彼の名を冠し、ブシェー石器と稱すべしと云うて居る程である。

ブーシエ・ド・ペルトは J.A.G. Boucher と Marie de Perthes の兒であつて、一七八八年九月十日に生れた。彼は一八〇二年即ち彼の十四歳の時、税關に職を奉じ一八〇五年より一八一六年に至る十餘年をイタリー方面に暮し、其後各地に轉職して一八二五年にアベービーユの税關

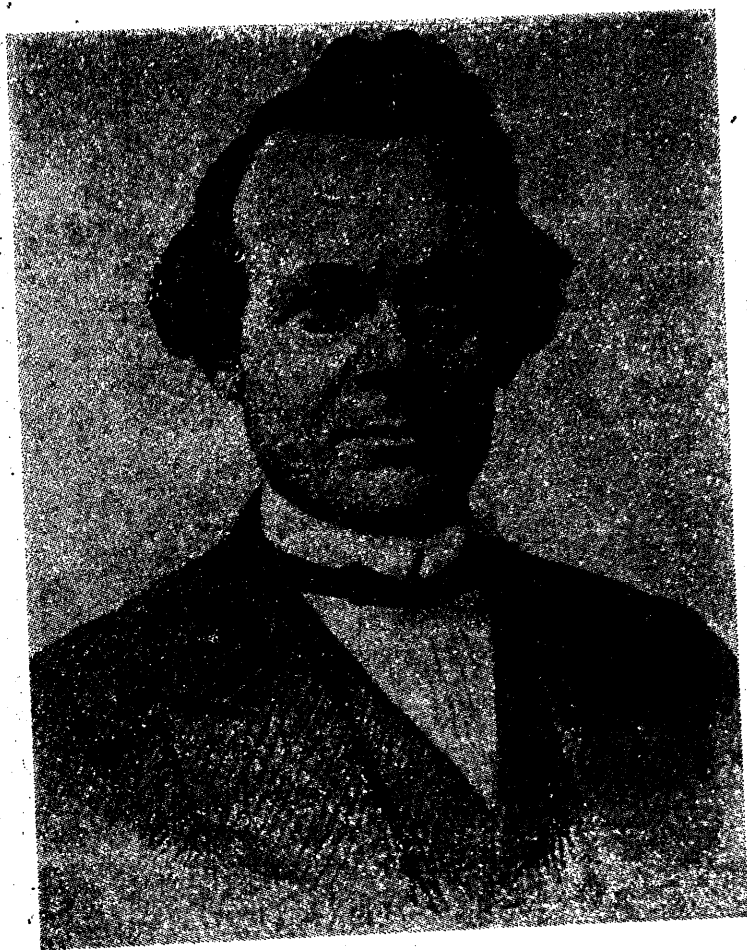


第八圖 舊石史前學の開祖
ブウシエー・ド・ペルト (J. Bayer,
Der Mensch in Eiszeitalter より)

長に着任し、一八三〇—六五年に亙る間、同地の Société d'émulation の會長を務めた。一八三六年の頃から地質學に専ら心を傾け、ソナム河谷に於ける石器に着意し始め、三九年頃より組織的に石器研究に着手し、四六年に前述した研究發表後、六四年には De la machoire humaine de M. ulin-Guignot.

Novelles découvertes en 1863 et 1864 の單行著述を出して居る。而して六八年にアベービーユに長逝した。其時までに彼れの學術其他に關した著作は四十九種に達して居る、彼れの史前遺物の集品は目下下巴里郊外、サンジェルマン (Saint-Germain-en-Laye) の歴史博物館に藏せられ、長へに彼の功業を傳へて居る。(M. Hoernes, N-U-M.

I. S. 379)



第九圖 ウィラルサヘ肖像

(A. Jerndorf 筆・S; Mueller, N-Aより)

ブーシェード・ペルト當初の研究發表後より一八六〇年に互る間には、色々の發見研究が續き、史前學界漸く多事となり、第二期への進展過程を示して居る。一八四八年にはジブラルタルの Forbes Battery 傍の石切場より後に有名となつた所謂ジブラルタルの頭骨と稱せらるゝ洪積人類の頭骨を發見せ

られたものゝ、未だ學者の注目する處とはならず、ロンドンに移送せられて居る(4)。一八五一年を迎へるや、デンマークに於て、トムセンの後繼者であるウラルサヘ (Asmussen Worsaae, 1821—1875) 出でて

デンマーク貝塚を研究し、當時自然に集積せられたものであると考へて居つたに對し、人爲の結果であると、貝塚研究の第一聲を放つて、これ亦北歐史前學に於ける誇りの一つを加へて居る。而して今日に至るも貝塚と云へば、直にデンマークを聯想せしめ、延いて彼の名を想起せしむるものがある(第九圖)。從來の經過を見てくると、史前學の發育は大觀した所北歐方面に於ては今日と雖、確實なる舊石遺跡の發見がなく、今日の中石以降の文化を見るのであるから、北歐が史前學上先進者であるにしても、其對照は中石以降に存する。これに對し西歐方面では、史前學上の研究は多く舊石時代を對照とせられ、從つて地質學、動植物學等とはより密接の關係にある(5)。而して所謂洪積史前學(Diluviale-Præhistorie)なるもの自身も、こうした姉妹學方面より開發せられた點は多く、北歐の如きと其發育を自づと異にするものがある。勿論西歐方面にも中石、新石以降、青銅、鐵時代等の資料も相應にあり、一部は古より氣付かれぬことは無いが、舊石研究に壓せられて所謂下積み勝となつて居り、この傾向は引續き今日にまで及んで居る。其内でも稍々、有名なのはスキスに於ける新石及び青銅時代以降に於ける一文化である。所謂棧上住居(Phalbau)(湖上生活、Lake dwelling)であつて、一八五四年にスキス、チュリヒ湖其他の湖水期に際し、同地の Ferdinand Keller が湖面に顯れた、棧研究をなし人工遺跡なることを發表して、此方面研究の端緒をなして居る。

洪積史前學方面に於ても、一八五七年には、ドイツ、Düsseldorf 郊外 Neandertal の洞窟より偶然に

も洪積人類の頭骨其他が出土したが、學者の氣付いたのは其翌年であつて、C. Fuhlrott, H. Schaffhausen 等によりこれを發表せられた(6)。これに關しては諸説相爭うたが、今日所謂チ安德ルタル人(Homo primigenius)と稱せらるゝ前期舊石時代歐洲に住んだ一人類の標式遺骨となつたのである(第十圖)。又この頃佛國に於て舊石研究は、ブーシェ・ド・ペルトに續いてラルテ(Edouard Lartet, 1801—1871)は各

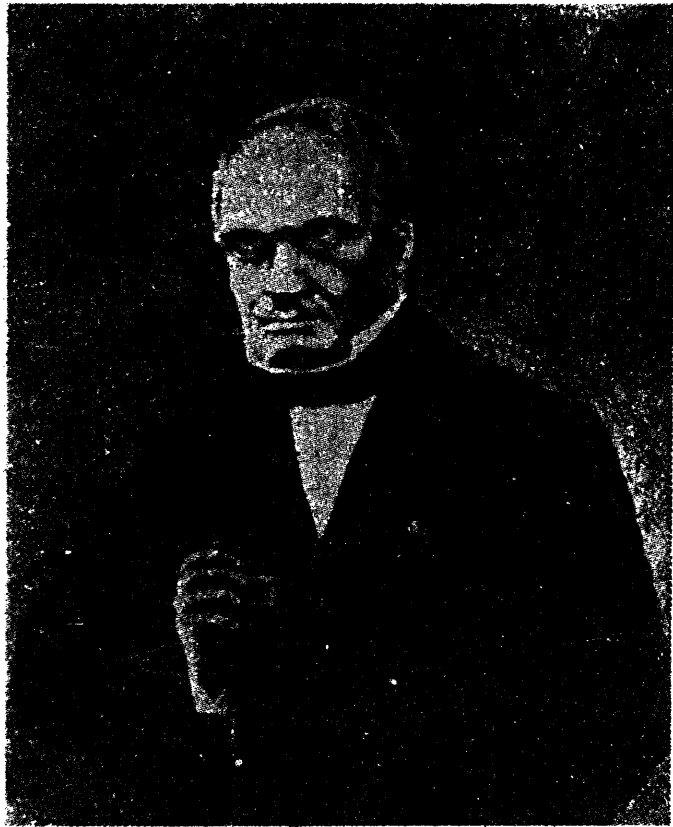


第十圖 ネアンデルタル人骨骼復原
(F. Wiegner, D-V-M より)

地に活躍し、中佛舊石遺跡の中心とも稱せらるゝ、Dordogne の Vézère 河兩岸の密集遺跡(今日約八十箇所)其他を調査し、ブーシェ・ド・ペルトが、其研究地の關係上、主として今日の前期舊石時代を研究したのに對しラルテの研究は今日の後期舊石時代に及び、且つ舊石藝術の發見の如き特筆すべきものがあり、一八六一年には早くも舊石編年を試み、後年モルチエ編年の準據をつくつて居る。只彼れの時代はペルト發見の直後であり、未だ整頓を見ず、舊石史前學の建設時代とも云ふ可き時であつたから、其編年如きも多く人々の採用する所とならず、後

年モルチエにより大成せられて、彼の名は動もすれば、ペルト・モルチエに覆はれ勝ちではあるが、舊石史前學に於ける一大建設者であるとは、否めない所である(第十一圖)(7)。

この黎明期最後のページに於て、更に二つの重要研究がある。一つは北歐のウラルサへであり、他は



第十一圖 ヲルテ (J. Bayer, M-E. A. より)

ダーウキン (Charles Darwin, 1809—1882) である。前者は、貝塚研究の積むに従つて、巨石墳 (Megalithic) 其他今日の新石文化と貝塚文化 (中石) の相違、同じく一言にして青銅文化、鐵文化と云はれる内にも、文化進展上の階梯あることに氣付き、こゝに之等の新舊に關する區分を試みた。即ち北歐石時代青銅時代を夫々新舊二期に、鐵時代を三期に編年區分したのであつて、所謂編年學 (Chronologie) 的研究の開祖とも

稱せらるゝ所であり、この編年も前述して居るヲルテの舊石編年に先だつこと二年なのである。他はダーキンの進化論で一八五九年に *The Origin of Species by means of natural selection*. が發表せられ、學界に一革命を齎して居る。

以上の如く史前學は、漸くにして生れ出で、又其各部分に於て成育もし、幾多の發見に伴ふ資料も増大して、今や第二期に進むべき順當なる過程を踏みつゝある。加ふるに姉妹學方面、特に進化論如きが出て、直接間接に史前學發育の進路をより開き、一面には科學的研究の内容次第に整備せられつゝある。

(1) ライエルの著書、地質學の原理は一八三〇—三三年ロンドンより出版せられて居るが、一方巴里では、三〇年七月三十日、ペリー學士院に於て、キュビエに對し、ラマーク説を有する Etienne Geoffroy de Saint-Hilaire, (1772—1844) は公開講演を行つて争うたが、キュビエに言ひ負かされて居る。而してキュビエは三二年には死んで居るが、其後繼者も相應に多く、且つ神學者方面より、この説を強く支持せられて居つたから、ライエルの學說發表後、直に災厄説が粉碎したのではなく、漸次に消滅したのである。又學者であり、災厄説を信じた結果、眞面目に災厄説を立證する爲、ノアの箱舟を搜出せんとしたものすらあつた。

(2) E. F. Baron von Schlotheim, Der Kalktuff als Glied aufgeschwemmten Gebirgsformation. 1722.

この遺跡は一八六三年に至り、Th. Liebe の發掘研究する所となり、馴鹿、厚毛犀、野馬、野牛、ロエナ、マンモス、洞熊等の共存動物を確め、これを報告した。Th. Liebe, Neue Ausgrabungen in Kestriz. Zeitschr. f. d. gesamten Natur W. in Gera. 1873—74. U. 1875—77.

(3) A. Boné は、この發見を La race humaine a-t-elle précédé la formation des terrains d'alluvion, ou est-elle même contemporaine de l'époque tertiaire et secondaire? Bull. de la société géologique de France, Paris, 1830, Bd. I. S. 105—107. に發表して居る。

(4) シュラルタルの頭骨は一八六八年に到つて、Norwich, なる記述 Broca, 1869. Quatrefiges. U. Harny, 1882. Neuenmarn, 1900 等相ついで、これに關する研究を發表して居る。

(5) 舊石史前學に於ける姉妹學關係に關しては、拙著歐洲舊石器時代(考古學講座)第一篇參照。

(6) C. Fuhrer, Menschliche Ueberreste aus einer Felsengrotte des Düsselales. Verhandlungen des Naturhistorischen Vereines.

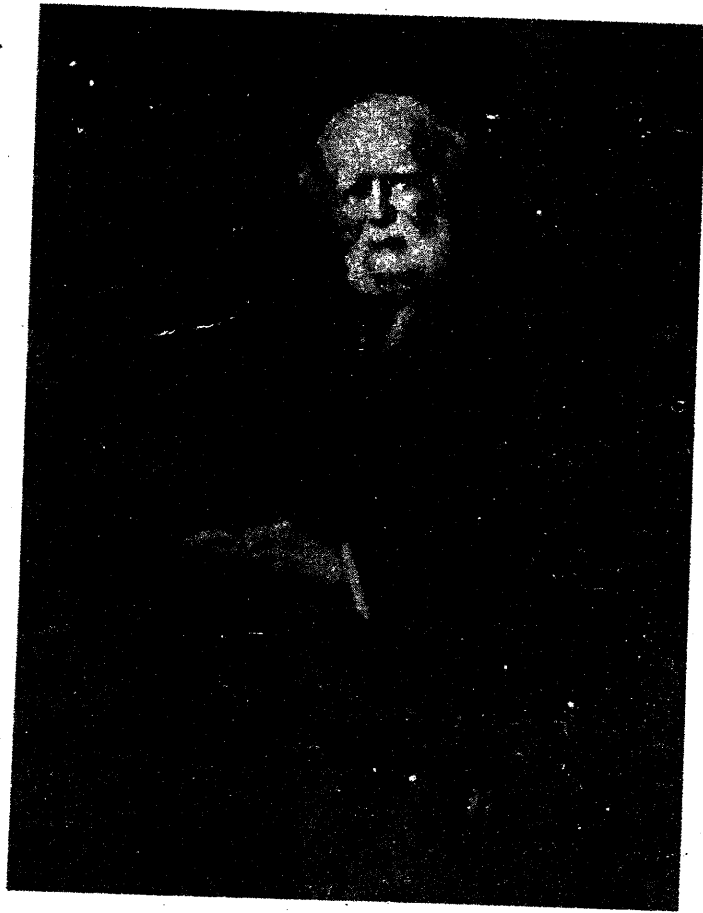
der preussischen Rheinlande und Westfalens. 18. 9. XVI.

H. Schnaffhausen, Der Neandertaler Fund. 1888.

(7) ラルテ没後四年、即ち一八七五年に *Reliquiae Aquitanicae* が出版せられて居る。

其四 第二期

この第二期と黎明期との境界は分明ではないが、ラボック (John Lubbock, 1834—1913) モルチェ時



第十二圖 ラボック (Lord Avebury)
(H. G. Hutchinson, Life of Sir John Lubbock
より)

代に始まり、大約一九一四年、歐洲大戰直前までを、假に第二期として述べることにする。歐洲大戰開始後より今日までの十餘年を第三期、即ち現在期として居るが、この現時に關しては、前に述べた如く、別に現況論とでもして稿を改める事し、今回はこの第二期を以て一先づ終つて置く。

斗ラボック (第十二圖) の石器時代區分とは、長大悠久なる石器時代に對し、石器時代を大別して舊石

史前學研究史 (大山)

(Paraeolith) 新石 (Neolith) の兩時代に區分したことであつて、石器時代研究に對し重要な編年區分である。勿論石器時代内に於ける編年區分は、既にウラルサエの試みた所ではあるが、ウラルサエのはデンマーク乃至北歐を主體としたものである。従つてウラルサエの編年は、今日の目から見れば、中新兩石時代の編年で西歐方面の舊石時代には觸れては居らない。これに對しラボックは、舊新兩石時代を編年したのである(8)。



第十三圖 シー・ド・モルチエ
(J. Bayer, M-E. A. より)

この頃は、史前研究の機運漸く進んで、一八六一年にはパリに École d'Anthropologie de Paris 生れ、六三年ロンドンには人類學會發會し、六六年スキス Neuchâtel に萬國人類學大會を開き、引續き六七年にはパリに同大會を催す如き盛況を呈して居る。

一八六八年に至り、佛國舊石研究の權威モルチエ (Gabriel de Mortillet, 1821—1898) 當初の舊石時代内に於ける編年を試みた。其後この編年には若干の改變があるが、萬を以て算する様なこの舊石時代の長期日内に於て、文化推移がある可きであり、且つ今日の事實より見ても多くの文化階梯が存する以上、碩學のこの點に着眼したのは當然で

あり、且つラルテ既に舊石内の相違に氣付いても居つた故、こゝにこの舊石編年の基礎が出来たので、今日尙モルチエ編年とまで稱せらるゝものである(第十三圖)。(9)

新石研究に於ても、スキス栈上住居跡の發見は、一八六六年に到つて、其數二百餘箇所を算し、北歐にては、一八六五年大トムゼンの没後を襲うてウラルサエ館長に就任し、スニードン・ルンドのニールン亦活躍し、夫々研究の進展を見て居る。

自然科學方面に於ても A. G. Nathorst は洪積以降の植物編年を試み、ダーウキンは「人類の由來」を著し、この方面よりする史前學の推進も亦、漸次密接となりつゝある。

一八七〇年代に於ては、史前學専門の學者も漸次其數を増してきた。舊石研究に於ては、佛國にピエト (Edouard Piette, ?—



第十四圖 ピエト (L'art pendant L'age du renne より)

1906) 出でてピレニ地方の諸洞窟を探查し、特に後期舊石時代に着目した結果は、各種の舊石藝術に關する遺物を發見して居る。其没後一年にして出されたる、一大圖版集 *L'art pendant L'age du renne*, 1907 に於てよく、彼れの研究を知ることが出来る(第十四圖)。七五年には佛伊國境の Grimaldi 洞窟群

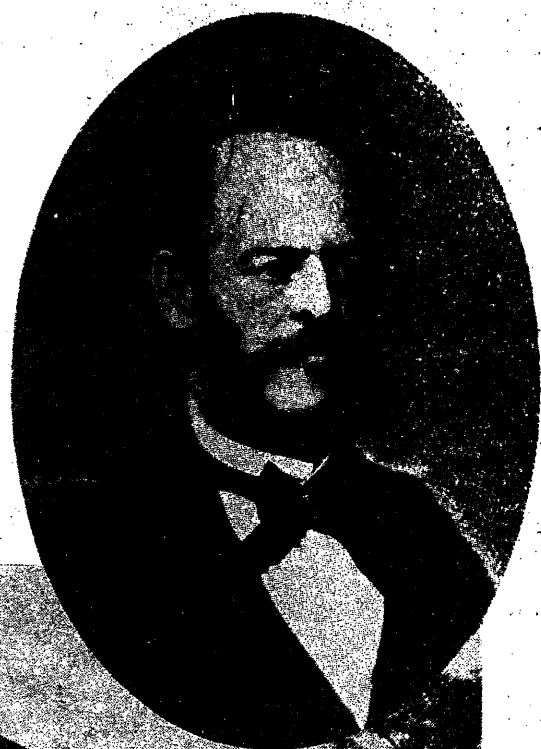
中より舊石人骨の完全なるもの出土し、G. Balcei は北アフリカの石器時代に關し報告する所があり、スペインに於ては、今日有名である舊石洞窟繪畫あるアルタミラ (Altamira) の洞窟を學術的發見者である同國のソトラ Don Marcelino de Sautuola が最初にこの洞窟を調査して居る。

このソトラの洞窟繪畫發見に就いては面白き挿話もあるが、これを略し、彼れは一八八〇年に到つて、洞窟繪畫に關し發表した。Breves apuntes sobre algunos objetos prehistoricos de la provincia de Santander. Santander, 1880 然し當時の學界は不幸にもこの發見をいれてくれないのみでなく、冷笑を以てこれに答へ、誰一人眞面目に取扱つかつてくれるものも無く、彼には學界承認をまつまでの歲月すらめぐまれずに、黙々としてこの世を去つた。而して移り行く世、進み出づる學術は、其後幾何もなく、各地に洞窟繪畫を發見し、且つは偽物とまでしたものが眞であるを知つた時には、彼の墓石はつめたく寂しかつた。一九〇六年、カルテラック、ブロイの大著 La caverne d'Altamira. に於て史前藝術に關した一大研究を發表するや、其卷頭にソトラの遺影を掲げ、其功業を述べて居る。これによりソトラ自身も靈あらば満足したであらうし、不遇の先學に對する、カルテラックやブロイの友情も美しく見らるる。そののみならず近年アルタミラ洞窟入口直上には、一基の記念碑すら建てられ、最近には小陳列館も添へらるゝに及んで、ソトラは永遠に記念せらるゝことゝなつた(第十五圖)。

七八年には Chouquet パリ郊外のシェル (Chelles) の前期舊石遺跡を調査し、當時に於ける舊石

編年上の問題に資した。これが今日「シエレアン」文化と稱する舊石編年當初の文化階梯にあるもの

の標式遺跡である。



第十五圖 舊石洞窟畫發見者ソナトラとアルタミラ洞窟 向つて左、家の左側にあるのがソナトラの記念碑、家は博物館。洞窟入口は記念碑の下にあり、この圖にては見えない。(ソナトラ寫眞は E. Cartailhac, H. Breuil, C-A より、アルタミラ寫眞は H. Obermaier の近信より)

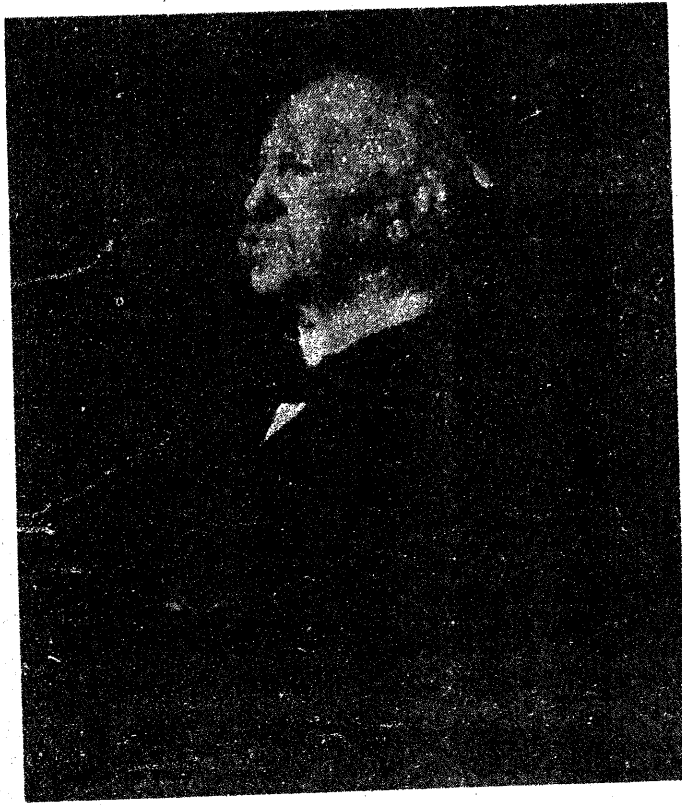
を放つて居る。この編年こそ今日の所謂「モンテリウス」編年(10)ではあるが、當時は未だ仲々學會で

新石方面に於ては、亦々北歐は先進して居る。七四年ストックホルムに於ける史前學大會の席上、スエーデンの碩學モンテリウス(Oscar Montelius, 1848—1921)は北歐新石編年研究の第一聲

は認むる所とならず、爾來奮闘二十餘年、漸く世界の承認する所となつたのは、この泰斗努力の結晶であり、今日これに敬意を捧げざるを得ない(第十六圖)。

我國に於ても七九年、即ち明治十二年にモールス (Edward Sylvestor Morse, 1838—1925) 教授によ

り始めて、大森貝塚の科學的研究を發表せられて、今日、我國に於ける史前學研究の基礎をなして居る。



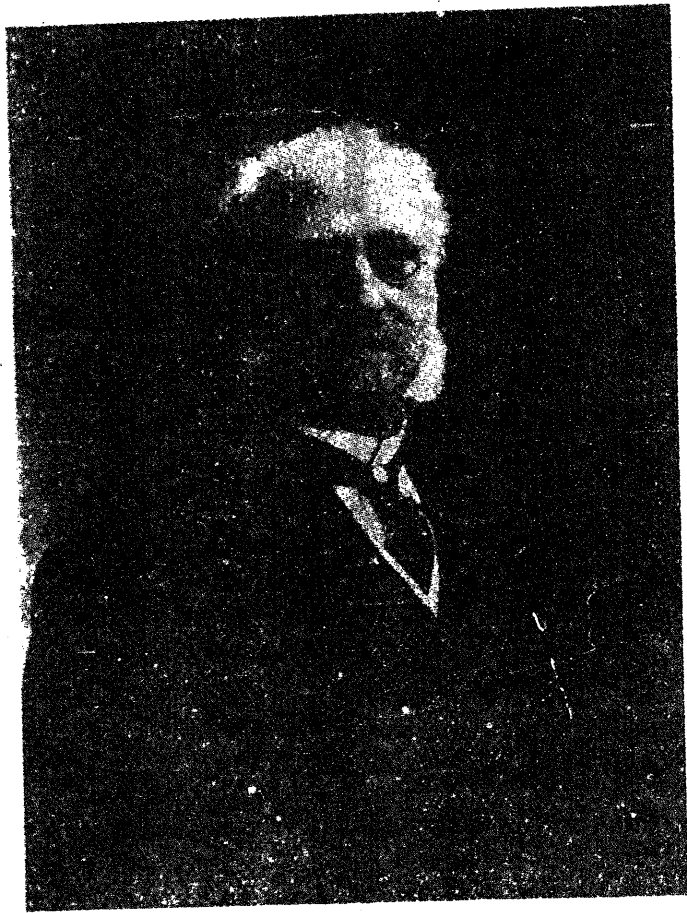
第十六圖 モンテリウス
(Oscari Monteio より)

史前青銅時代研究に於ては、デンマークのミユラー (Sophus Müller) (ウヲルサへの後任者で現コッペンハーゲン國民博物館々長) は北歐青銅編年に關して所信を述べ、古典考古學に盛名を歌はるゝシユリーマン (Heinrich Schrennanu) は既に七一年にホーマーの歌へるトロヤを發掘

して大なる成果をあげて居る。

學會も亦多事となつた。六九年には人類學大會をコッペンハーゲンに開き、七〇年にウキーン、七二年には史前學大會をブラッセルに、七四年にはストックホルムに催す如き盛況となつた。

一八八〇—一八九の十年間に於て、此第二期當初に築かれた、ラルテ、モルチエ等の舊石研究の大綱には大なる變化はないが、發掘、研究を増すに従つて細部が次第に補正整頓せられ、ラボック、モルチエについて、ピエト、カルテラック (Emile Cartellac, 1842—1922) (第十七圖) アー・モルチエ (Adrien de Mortillet) 等の活躍する時代となつてきた。



第十七圖 カルテラック (H. Obermaier, M-V より)

が増加しつつある。

新石時代に關しては、モンテリユスの研究次第に進む外、特筆するものなく、我國に於ては八三年(明治十六年)飯島、佐々木兩先學により陸平貝塚の研究發表があり、其翌年には今日の東京人類學會の前

身が創立せられて居る。又 W. H. Holmes は印度石器時代を研究發表する所があつた。

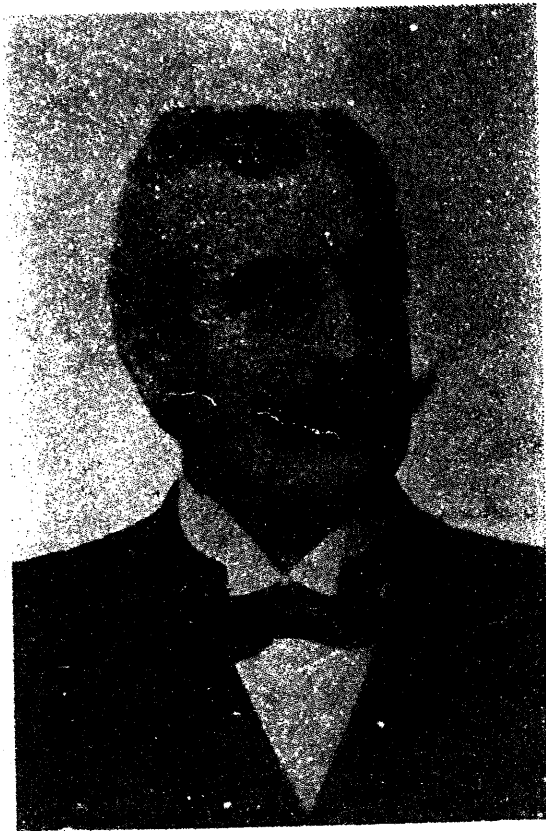
青銅時代に於てもモンテリユス北歐青銅時代(八〇—八二年)を研究發表し、鐵時代方面にては、O. Tischler 八五年に La Tène 時代を設定して、前述して居るハルスタット文化に續いてラテン文化を認め、シュリーマンは引續いて、ギリシアの史前發掘に従事し、八〇年、八四年には Orchomenos を發掘して居る。

以上の如く大勢は各方面に進展を見るに従つて、夫々内容が充實し、これに伴うてそろそろ史前學内に於て、石時代、青銅時代等夫々の研究分課が出来てきつゝある。これが一八九〇年以降の十年に進んでも、大體に於て大なる變化はない。舊石研究の如きも、各地に發掘研究こそ行はるれ、とりたてゝ申すまでのこともない。

今日の中石文化に關しては、ジー・ド・モルチエは九〇年に Fère en Tardenois の遺跡にちなんで、タルデノアシアンを編年設定し、九四年には Harle は La Tourasse を發掘した。これがモルチエの編年したトゥラシアンであるが、これと同一文化を九五年にピエトが Mas d'Azil により、アジリアン文化と名けた爲、今日ではピエトに従つてアジリアンと稱して居る。九八年には Ph. Salmon, d'Ault du Mesnil, L. Capitan 等は Campignie を發掘研究し、これをカンピニアンと編年設定した。此の如く中石文化が次第に具體化してきたのは、新舊兩石編年が一通り出来てみると、この兩者相互間には相違があつて、容

易に文化上接續しない。即ち中間缺除して居ることに氣付き出して、搜索した結果に外ならぬ。それでも以上發見のみでは未だ充分でない。これが所謂新舊兩石間に於ける溝渠問題であつて、或る意味に於ては、今日も遺されたる一重要問題なのであつて、此頃から問題が起り出したのである。

新石方面、北歐モンテリユス編年も漸次讃同を得ると共に、其研究の増大は、これ亦其地歩を獲得し



第十八圖 ヘルネス (H. Ob. rmaier, M—V より)

て、世界の碩學として、大モンテリユスと敬せられんとしつゝある。中歐方面に於ては、所謂中歐系新石文化の一大中心である、舊境 Saurjevo 近郊 Butmir に於て W. Radensky は奥の碩學ヘルネス (Moritz Hoernes, 1852—1917) (第十八圖) の共働を得て、大なる發見をなして居る。

この時代に於て、特記すべき出來事は、九

一年にフランダの軍醫 E. Dubois は南洋ジャバ Trinité に於て有名なる直立猿人 (Pithecanthropus erectus) と名づけられた一頭蓋其他を發見し、學界驚異の的となり、今日に到るも賛否兩論を存する程の波動を學界に起して居る(第十九圖)。

自然科學方面に於ては、九四年ドイツ Dautzen の洪積層より極寒系動植物共出して、久しく望まれた洪積動植物の連絡なり、引て洪積史前學上、編年準據となるものがあり、ドイツの Ernst Grosse は藝

術の始源を著し、史前

藝術を比較土俗學の方

法により研究せんとし

これに對しヘルチスは

九八年、歐洲形象藝術

古史を以て前者を反駁

し、史前藝術は史前藝

術として研究すべきで

あることを示した。

此の如くにして、終

に二十世紀を迎へ、英

にマンロー(R. Munro)



第十九圖 直立猿人と稱せらるゝもの復原
(A. Rutot, R-P-R-H より)

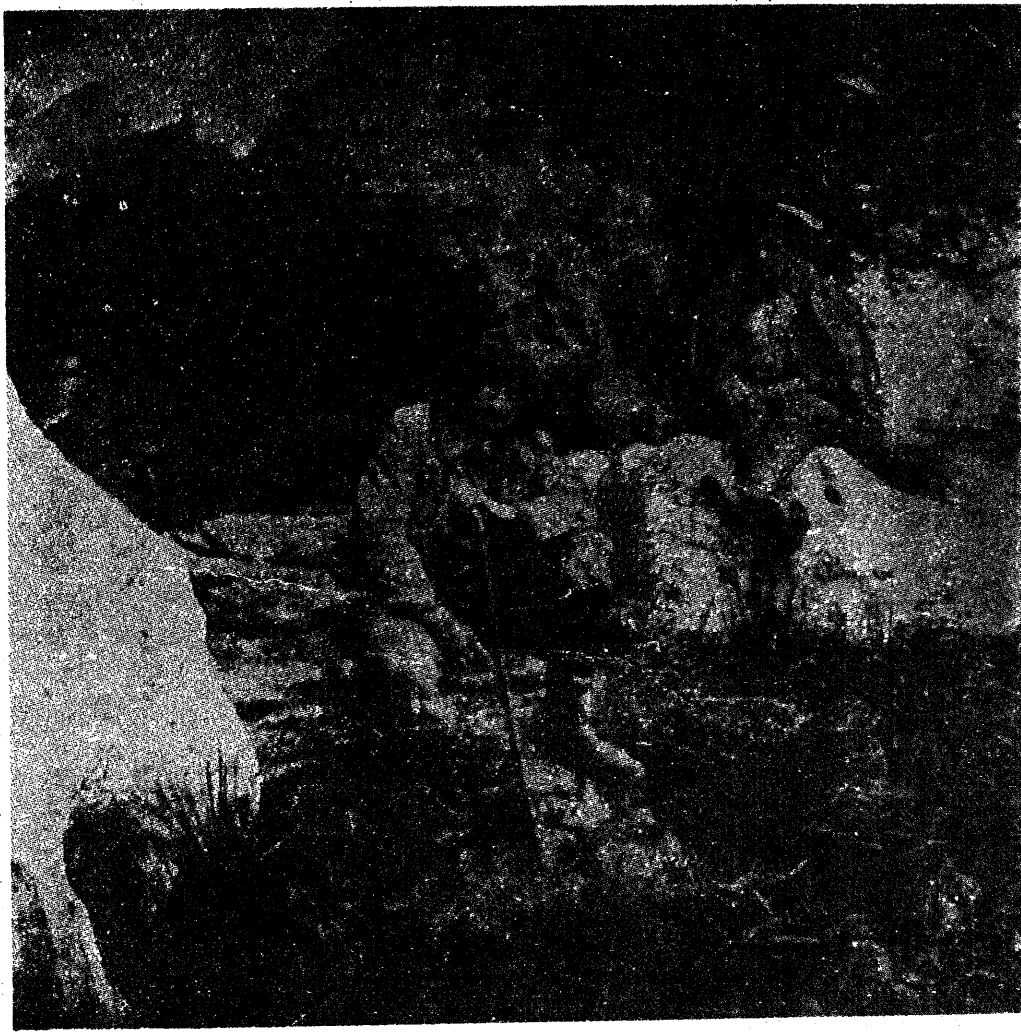
ソララス(W. J. Sollas)米にヲスボン(H. F. Osborn)佛に J. Déchelette, J du Morgan, Salmon Reinach,

Henri Breuil, (第二十圖) Marcellin Boule (第二十一圖) 獨塊に Hugo Obermaier, Hubert Schmidt, R. R. Schmidt, Karl S. Huchvaldt 等の主として舊石文化を鮮明し、デンマークに Thomas Thomsen, Georg Sarauw ノルエーの A. W. Brøgger 等は北歐先進の誇りを守り、各地に研究は盛んとなつてきた。

この十九世紀末より二十世紀初めに互つて、特に舊石研究に於ては、一通り目鼻もつき、一般社會よりの要求もあることとして、綜合研究がより多く行はれてきた。勿論既にラボック (六四年) モルチエ (六八年) カルテラック (八九年) 等多く試みられては居るが、新に各國に於て取纏つた著作が著しく増加して居る。中石研究は依然謎として取りのこされ、新石研究は北歐に於てこそ、モンテリユス、ミュラー等の努力により、立派に編年綜合せられて居るものゝロシア (所謂バルチック系) 中歐 (バンド土器系) スキス (栈上住居系) 西歐等の各新石文化には、夫々の特色次第に鮮明を加うるに従つて、相互の關係相複雑して、甚しく錯雜の度を加へ、今日のドイツ各地の如き、全く小黨分立の如く、一小文化群互に入り亂れて、何時整頓せらるゝや、果しなき有様とまでなつて居る。

青銅以降の研究も北歐は、モンテリユス、ミュラー等により新石と同様に整頓を見、且つイタリーの如きは、モンテリユスにより研究發表せらるゝが如き状態にあつた。

我國に於ても坪井小金井兩博士を中心として、大に發展する所があり、世界に於ける研究の分野も次第に廣くアフリカ、近東、シベリア等にも及んでゐる。



第二十圖 La pasiega 洞窟に於けるプロイ、N. C. Nelson 等東道の際、
Nelson撮影。(H. F. Osbrn, M-O-S より)

一九〇七年にはドイツ・ハイデルベルグ郊外、Manuelの洪積層中より古人類の下顎を發見した。これが所謂ハイデルベルク人と稱せらるゝものである。○五年には、J. Hoopは文化植物始原に關する研究を行ひ、史前民と植物との關係をより明にし Albrecht Penk, Eduard Brücknerは共働の大著、アルプス山の氷期を著して、氷期の地質學的研究を試みたが、延いて舊石編年に及ぼす所深く、今日に到るも尙氷期と舊石編年との關係に就ては定論を見ざる有様である。

十年にはモナコ太公の出資により、パリに化石人類研究所を創立せられて、斯學の向上を計られ、且つ多くの事業をなして居る。現に今日も、ブール、ブロイはこゝにあつて研究を續けて居る。

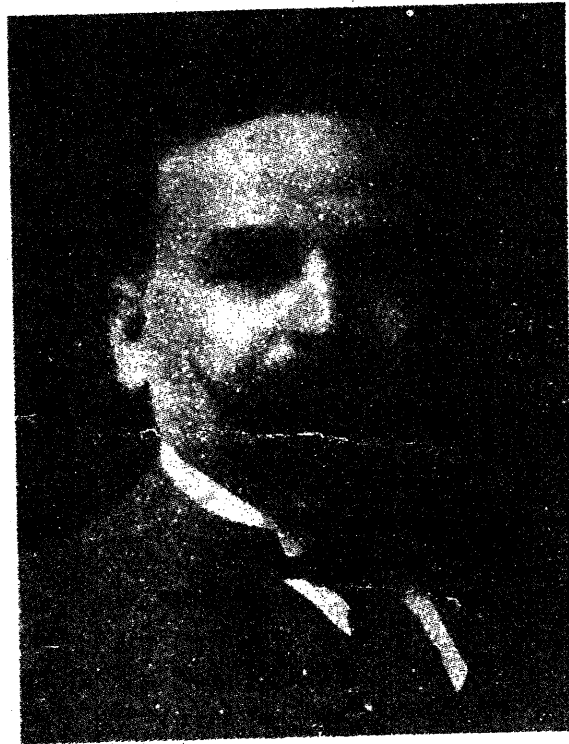
この様にして一九一四年歐洲大戰を見るに及んで、各國國を傾けて戦ひ、學者をして安かに、各遺跡

を調査し、各遺物を研究するの餘裕を與へず、直接戦争に關係ない他の諸學と共に、一時頓挫を見、

纔かに戦渦の外にある國々により研究を持続せらるゝ有様であつた。

(8) ラボック舊新編年よりこの方、ウナルヘサへの編年は、單に新石内に於ける編年と考へられ、従つてデนมマーク貝塚構成時代の如きは、古き新石時代に稱せられ、今日に到るも、尙この考を有するものすら存する。

又ラボックは後に Lord Avebury の稱號を受け、其評



第二十一圖 プール
(J. Ritthie 英譯の Fossil Men より)

傳は Horace G. Hutchinson, Life of Sir John Lubbock, Lord Avebury. London. 1914. にある。

(9) モルチエ當初の編年は次の四期である。

- I l'Époque du Monstier
- II l'Époque du Solutrén
- III l'Époque d'Aurignac

史前學研究史(大山)

IV l'Époque de la Mésolithe.

この編年に於て、前期舊石時代は單にムスチエのみで、且つⅢのサオリナツクがソルトレーン後に入つて居り、これは一八八三年に一度取り除かれたが、一九〇六年、フロイにより直しき位置に編入せられて居る。然しこの碩學の過誤が今日吾人等に或る大なるヒントを與へる程、それ程大なる謎が遺されて居る。

(10) モンテリユス編年に就ては、拙稿、北歐の巨石墳（人類學雜誌、第四一の九）及び北歐の石斧編年（同上、第四一の十）參照。

第五　結　論

今迄に述べ來つた先學努力の跡を、更に取り纏めて見ると、史前學發生の意外に遅いのも、全く科學の進運に伴うて居る。特に當時の信仰心から發して居る人類發生論の如きが、深く學術の内容にまで及んで居つては、史前學など容易に誕生し得ない。科學が信仰より獨立してから漸く其進路が解放せられたのである。而して他には史前學の進歩は多く他の姉妹學の進歩に平行しないと兎角行きづまり勝となることも考へねばならない。史前に於ける編年の如きは、狹義の史前學的資料のみでは不充分の場合もある。多くが土中より出土せしむるものであるから、都合よく色々整うてはくれない。この様な場合には、他の何等か自然科學の或るもの等と結んで、編年して行けば、たゞに史前學上の確からさを増すのみならず、自然の法則なる強き背景を負うことが出来るのである。特に地質學の如きは、史前遺物を藏するものが地層である以上、其地層に於て、編年準據を得れば、確實でもあり、容易でもある。然るに

地質學それ自身に於て今日尙幾多の問題があり、容易に吾れ等史前學徒の要求するまでに研究が進んで居らない。前述して居る洪積氷河問題の如き顯著なる一例であつて、今日歐洲舊石研究の一部に於ては、この氷河問題に起因して、行きづまると云へば、云はれるものがある。以上の如く全く史前學外の問題に於て、史前學の前途に及ぼす所深い拘はらず史前學は史前學として前進せざるを得ない使命がある。今述べ來つた史前學先輩の努力の裏にも、常にこうした難關に幾度となく出遇いながらも、何んとか奮闘してこゝまで史前學を導いてきた、其尊き努力に敬意をはらつて戴きたい。

他には如何に卓越した研究でも時勢が進んで居らなければ容易に世にいれられない。ラマーク、ソトラ、モンテリユス等多くを數へ得る。大モンテリユスの如き、碩學大儒すら、其北歐編年が世に認めらるゝまでには十餘年を費して居る。然し己れ自からの正論を否定せられ、全く世に認められず、不遇に死んだ、今日甚だ遺憾と同情にたへない例すら、ラマーク、ソトラ等に見るではないか。それ故私共は先學の卓識に對しては、心からの敬意を捧げると共に、學術の研究は眞理に直進すべきであつて、世論を目標とすべきでない云ふことが、かく發育史をたどつて見ると教へらるゝ所が深い。

(昭和三年十一月七日大典叢列行の前夜稿了)

附記。

掲出した先學の寫眞に於て、未だ甚しく不足を見て居るのは、著者自からも甚だ不満である。然し追

追と追補は考へては居る。特に著者の師事したフリーベルト・シュミット博士及びスペイン、マドリットにて指導を受けたフリーバーマイヤ教授の分なきは遺憾にたへぬ所である。

参 照 文 献

1. Abel, O. Die vorweltlichen Tiere in München, Sagen und Abergraube. 1923.
2. Bulle, Heinrich. Handbuch der Archaeologie.
3. Cartailhac, E. La France préhistorique. 1889.
4. Haddon, A. C. History of Anthropologie. 1910.
5. Hoernes, M. Natur- und Urgeschichte des Menschen. 1909.
6. Müller, S. Nordische Altertumskunde. 1896.
7. Wiegner, F. Diluviale Vorgeschichte des Menschen. 1928.
8. 山名邦治、生物學史。

史前學研究年表

1. XV J. H. Leonard da Vinci (1452—1519) 地質に層位あることを認む。
2. XVI J. H. Michele Mercati (1541—1593) 石器の人工物たるを知る。
3. XVII J. H. Nicolaus Stenon (1638—1687) 化石に関する學術的記述をなす。

4. 1700. Kannstadt bei Stuttgart in Württemberg. 1. 古人骨を發見せるも、未だ着意せられず。
5. 1717. M. Mercati, の遺稿 *Metamorphoea Vaticana* 出版せらる。
6. 1723. Akademie der Wissenschaften zu Paris 未だ石器を天降物となす。
7. 1726. J. J. Scheuchzer, *Homo diluvii testis* と稱しサソシ、モノウラの化石を人類と誤認す。
8. 1749. Georg Leclerc, Comte du Buffon. (1707—1788)
Histoire naturelle et particulière を發表す。
9. 1753. Karl von Linné (1707—1778),
Systema naturae を發表す。
10. 1763. Johan Johachim Winckelmann (1717—1763),
Geschichte der Kunst des Altertums を著し今日の古典考古學の基を開く。
11. 1764. Dambenton (1716—1799)
Difference de la situation du trou occipital dans l'homme et dans les animaux を著し *Kraniologie* を
 開發す。
12. 1774. J. F. Esper, Fränkischen Schweiz に洞熊と共に古人骨を發見す。
13. 1775. J. F. Blumenbach (1752—1816)
Humani varietate nativa を發表、自然人類學の發育を見る。
14. 1786. Gottlob Werner (1749—1817),
Geognosie を著す。
15. 1785. S. T. V. Sommering (1735—1830),
Ueber die Körperliche Verschiedenheit der Neger von den Europäern, に於て自然人類學研究に資す。

16. 1794. William Smith (1769—1839), 地質學 (Geologie) を創立す。
17. 1797. John Frere, Clay pits at Hoxne, Suffolk に石器を発見す。
18. 1797. L. C. F. D. Cuvier (1769—1832) 絶滅動物の存在を認む。
19. 1799. Charles White, (1728—1813)
Account of the regular gradation in Man and different animals and vegetables. を著す。
20. 1801. Jean du Lannark (1744—1829)
Systeme des Animaux sans Vertebres を著す。
21. 1801—5. L. C. F. D. Cuvier
Lecon d'Anatomie Comparer を發表、比較解剖學を開發す。
22. 1802. J. Lannark,
Recherches sur l'Organisation des Corps Vians を出す。
23. 1807. Mémoires de la Société des Antiquaires de France, Paris に生る。
24. " The geological society of London 生る。
25. 1809. J. Lannark
Philosophie zoologique を發表、進化論の先驅をなす。
26. 1812. L. C. F. D. Cuvier
Recherches sur les ossements fossiles を出す。
27. 1815. W. Smith, Geologie に関し發表す。
28. 1816. L. C. F. D. Cuvier
Le Regne Animal Distribue d'apres son Organisation を出す。

29. 1820. Baron von Schlotheim
Köstritz in Thüringen に化石人骨を發見せるも、未だ特別の注意をなさず。(1863, Th. Liebe の發掘に於て、多くの洪積動物遺骨を得)
30. 1832. William Buckland,
Reliquiae Diluvianae に於て、洪積 (Diluvium), 沖積 Alluvium) を區分す。
31. 1823. Ami Boué (1794—1881)
ドイツ Schuttertales bei Lahr in Baden の黄土 (Löss) 中より古人骨片を發見す。
32. 1821—25. Northmore and Prister Reverend Mac-Eneary
英國 Kent 洞窟よりマンモス、厚毛犀等人工燧石を發見す。
33. 1827. Bory de Saint-Vincent
L'homme, Essai zoologique sur le genre humain を著す。
34. "
Paul Tournai
フランス Aude 縣 Bize の洞窟を發掘、古人骨、洞熊、野馬、馴鹿、野牛其他を共出す。(1829年 Annuaire des sciences naturelles XVIII にこれを發表す。
35. 1830. Société géologique du France, Paris に生る。
36. "
Etienne Geoffroy Saint-Hilaire (1772—1844)
Lamarck 説を以て Cuvier と論争す。
37. 1839—33. Charles Lyell (1767—1875)
Principles of Geologie に於て Cuvier の災厄説を破る。
38. 1832. Marcel de Serres, 巴里博物館解剖學に於て、人類自然史なる獨立講義の教壇に立つ。

39. 1832. デンマーク、コッペンハーゲンにては既に Aarbøger for Nordisk Oldkyndighed og History を発行しあり(始年未調)
40. 1833—34. 動物學者 Schmerling, Engis, Englioul 等ベルギー、Liège 附近の洞窟を調査し、人骨片と共に、熊、ヒエラ、象、犀等を Lehm 層より發見報告す。
41. 1836. Christian Jürgensen Thomsen, (1788—1865) 石、青銅、鐵の三次文化重分を發表す。
42. 1837. Friedrich Lisch, トムセンと同様の文化重分を設定せると多く世に出でず。
43. 1838, Sven Nilson (?—1883) 始めて史前學 (Præhistorie) と稱す。
44. " London に士俗學會生る。
45. 1839. Boucher de Perthes (1788—1868) 石器に関する組織的研究に着手す。
46. " Paris に Société ethnologique 生る。
47. 1840. Godwin Austen 英國 Devonshire に燧石器及び獸骨を發見す。
48. 1842. Japetus Steenstrup 北歐氷後期植物孺年を試む。
49. 1843. Asmussen Worsaae (1821—1885)

Danmarks Oldtid を著し、石造墳の性質を明にす。

50. 1844.

Revue archéologique, Paris より出づ。

51. 1846.

スミス、Salzkammergut に於ける Hallstatt 郊外に史前時代の古墳群発見せらる。

52. "

Boucher de Perthes

洪積組に於ける人類存在し且つ石器を使用せりと發表す。

53. 1847.

英國 Tonguay 自然史協會 Kent 洞窟を發掘調査す。

54. 1848.

Gibraltar の小洞窟中より古人骨発見せらるゝも未だ注目せられず。

55. "

Deutsche geologische Gesellschaft, Berlin に生る。

56. 1849.

Geologische Staatsanstalt in Oesterreich, Wien に創立せらる。

57. 1851.

A. Worsaae,

デンマーク貝塚を研究し貝塚の人工の結果なることを發表す。

58. 1852.

佛國 Grotte Aurignac に古人骨其他を發見せらる。

59. 1853.

M. de Serres

Paleontologie Humaine を著す。

60. "

Dr. Rigollet,

西佛 Saint Achoule に石器を發見す。(翌年これを發表す)

61. 1854.

Ferdinand Keller,

スミス Zurich-See に於て木上住居 (Phahlbau) を發見研究す。

62. 1857.

ドイツ Neanderthal の人骨出土せると専門家は未だこれを知らず。

63. 1858.

ロンドン Royal society, Windmühlen 洞窟を發掘調査す。

史前學研究史(大山)

(三三)

一四七

64. " C. Fuhrroths, H. Schnaffhausen
Neandertal 人に關する最初の發表をなす。
65. 1859. A. Worsane
北歐石器時代並に青銅時代内に於ける編年 (Chronologie) を試む。
66. " Charles Darwins (1809—1882)
The Origin of Species by means of natural selection を發表す。
67. 1860. John Evans
On the occurrence of flint implements in undisturbed beds of gravel, Sand and clay, (Archæologia,
1860. Bd. 38) を發表す。
68. 1861. Ecole d'Anthrologie de Paris 生る。
Edouard Lartet (1801—1871)
舊石編年を試む。
70. 1863. Ch. Lyell
Geological Evidences of the Antiquity を發表す。
71. " E. Lartet et Cristy,
Le Moustier 洞窟を發掘し翌年これを報告す。
72. " London に人類學會生る。
F. A. Perteire da Costa,
ポルトガル Mugen 貝家を發掘調査す。
74. 1864. British Association. Kent 洞窟を調査す。

75. " E. Lartet et Christy,
La Madeleine を調査報告す。
76. 1865. J. Lubbock
Prehistoric Times を著し、新舊兩石器時代を編年區分す。
77. " New York に人類學會生る。
78. " St. Petersburg und Moskau に人類學會生る。
79. 1866. スキスの Phalbau 遺跡 200 餘箇所を算するに至る。
80. " フォイツに Archiv fuer Anthropologie 創刊せらる。
81. " 英國 Manchester に人類學會生る。
82. " スキス Neuchâtel に英國人類學大會を開く。
83. 1867. E. Lartet
石時代綜合編年を試む。
84. " Garrigou,
初めて Mus d'Azil を調査報告す。(1891, Cartailhac, 1894, Piette 再報す)
8. " Paul Gervais
石時代編年を行ふ。
86. " Paris に萬國人類、史前、考古學大會を開く。
87. 5838. 佛國 Dordogne 縣 Cro-Magnon に後期舊石時代の人骨を発見す。
88. " Gabriel de Mortillet (1821—1898)
舊石編年を試む。

89. " イタリア - Florenz に人類學會生る。
90. " Norwich に人類學大會を開く。
91. " R. de Ferry,
Solutré を發掘報告す。
92. 1869. Kopenhagen に人類、史前學大會を開く。
93. " Berlin に人類學會生る。
94. " Berlin 及び Zeitschrift für Ethnologie 發行せらる。
95. " C. E. Lischke,
日本海岸に於ける貝類研究を發表す。(明治二年)
96. 1870. A. G. Nathorst
北歐植物編年を試む。
97. " Wien に人類學會生る。
98. 1871. Edouard Piette (1827—1906)
佛國 Pyrenæ 地方の石時代諸遺跡を調査す。
99. " Ch. Darwin
The descent of man and en selection in relation to sex を發表す。
100. " ウキーン及び Mitteilungen 發行せらる。
101. " Heinrich Schriemann 1832—1890),
Troya を發見調査す。
102. " Journal of the anthropological society 生る。

103. 1872. ベルギー - Brussels に英國史前學大會を開く。
104. " E. Riviere
伊佛國境 Grimaldi 洞窟の發掘調査を開始す。
105. 1873—82. A du Quatrefoye et E. Hany
Crania ethnica, les crânes des races humaines を著す。
106. 1874. Stockholm に人類、史前學大會を開く。
Oscar Montelius (1848—1921) 北歐石器編年を力説す。Hans Hildebrand の提唱により Hallstatt 文化
なるものを設定す。
107. " Stockholm に人類會生る。
108. 1875. G. du Mortillet
佛國地方の青銅編年を試む。
109. " Grimaldi に古人骨發見せらる。
110. " G. Balacci
北亞の石器時代に關し報告す。
111. " Don Marcelino de Sautola
スペイン Alcaniza 洞窟遺跡を發見す。
112. 1876. A. Blytt,
植物編年を試む。
113. " S. Müller,
Die norrische Bronzezeit und deren Periodenteilung を著す。

114. 1878. H. Schriemann,
ギリシア Mykenae を發掘す。
115. "
Chouquet,
佛國パリ-郊外 Chelles を調査す。
116. "
Edward Sylvester Morse (1838—1925)
大森貝塚を調査報告す。(明治十二年)
117. 1880. H. Schriemann,
ギリシア Orchomenos を發掘す。
118. 1880—82. O. Montelius.
Spaennen fran Bronzealdern を發表す。
119. 1881. G. de Mortillet
Musée Préhistorique を著し、綜合研究の一方法を示す。
120. 1882. K. Maska,
中歐 Sipka の古人骨を發見す。
121. "
Constantin Grewingk,
舊露 Kunda を發掘調査す。
122. 1883. 飯島、佐々木兩先學、
Okadira shell mound at Hitachi を著す。(明治十六年)
123. 1884. 東京人類學會の基礎生る。
124. "
Albrecht Penk,

Mensch und Eiszeit (Archiv f. Anthr. Bd. 15) 氷期人類を説く。

125. " W. H. Holmes
印度に於ける石時代に関し發表す。
126. 1835. O. Tischler
史前後期鐵時代の La Tène 文化を限定す。
127. 1886. Marcel de Puydt, Max Lohest,
ベルギー - Spy に古人骨を發見す。
128. 1837. E. Piette,
Mas d'Azil を發掘調査す。
129. 1838. Bourret et F. Regnault,
Mularnaud 洞窟より古人骨を發見す。
130. " The American Anthropologist 發刊せらる。
131. 1839. d'Ault du Mesnil
舊石時代中に Acheuléen を編年挿入す。
132. " Emile Cartailhac (1812—1922)
La France préhistorique を著す。
133. 1890. L'anthropologie 出版せらる。
134. " H. Schriemann,
Troja の第二回發掘を試む。
135. " G. de Mortillet

Tardenoisien (今日の中石文化) を編年設定す。

136. 1897. Eugene Dubois

スマタに所謂直立猿人 (*Pithecanthropus erectus*) を発見す。

137. " H. G. Bronns

Klassen und Ordnung des Tier-Reichs を發表す。

138. " E. Westermarck

History of Human Marriage を著す。

139. 1892. Goetze

ドイツ Taubach-Ehringsdorf の舊石遺跡を發掘調査す。

140. 1894. Harlé

佛國 La Tourasse (今日の中石遺跡) を發掘報告す。

141. " ドイツ Deuben の洪積層より極寒動植物共出し動植物兩編年間の聯絡明となる。

142. " Ernst Grosse,

Die Anfänge der Kunst を著し、比較土俗學の見地より史前藝術を研究す。

143. 1905. E. Piette,

舊石末に Azilien を編年加入す (今日の中石文化)

144. " W. Radinsky und Moritz Hoernes (1852—1917)

中歐 Butmir bei Sarajevo 新石遺跡を發掘報告す。

145. 1896. Chauvet et Rivière

佛國 Dordogne 縣 La Vache 新石遺跡を調査報告す。

146. 1898. O. Montelius
Die Chronologie der ältesten Bronzezeit in Norddeutschland und Skandinavien. を發表す。
147. " Ph. Salmon, Ault du Mesnil, L. Capitan
Campignien (今日の中石文化) を編年設定す。
148. " M. Hoernes,
Urgeschichte der Bildenden Kunst in Europa を著し、史前遺物により史前藝術を研究すべきであること
を述ぶ。
149. 1899-05. K. Gorjanovic Kramberger,
中歐 Krapiina 洞窟より舊石人骨を發掘す。
150. 1900. A. P. Madsen, S. Mueller, u. a.
デネービー川貝塚に関する綜合研究を行ふ。
151. " Johanna Mestorf
Moorleichen を發表す。
152. 1903. Georg. F. L. Sarnau
デネービー川、Maglemose (中石遺跡) の研究を發表す。
153. " M. Hoernes
Der diluvial Mensch in Europa を著す。
154. 1904. Raphael Pumpelly 一行。
Turkistan 地方を探險し、特に Amu を發掘す。(1908 に報告發表)
155. " Thomas Thomsen

史前學研究史(大山)

デューラー Brandand (中石遺跡) を發掘報告す。

156. 1905. A. J. Evans

The Prehistoric Tombs of Knossos を著す。

157. " J. Hoop

Waldkulturen und Kulturpflanzen を著し、植物史前學的研究をなす。

158. 1903. Henri Breuil

舊石編年中に從來問題とせられた Aurignacien を編年挿入す。

159. " E. Cartailhac et H. Breuil,

La Caverne d'Audoubert を發表し、舊石藝術を明にす。

160. 1907. フォッ、Heidelberg 郊外 Mauer の砂中より古人骨を發見す。

O. Schostensack これを Homo Heidelbergensis と名く。(1908)

161. " E. Piette の遺稿、L'art pendant l'âge du renne 出版せられ、主として後期舊石に於ける藝術遺物の集成をなす。

162. 1908. A. et J. Bouysseon, Bardon

Bouffia 洞窟より古人骨を發見す。

163. " Otto Hauser,

Le Münster より古人骨 (ネアンデルタール形) を發見す。

164. " J. Déchelette,

Manuel d'Archéologie を著す。

165. " A. W. Brögger

ノルウェー Viste 洞窟貝塚を調査報告す。

166. 1909. M. Hoernes,
Natur und Urgeschichte des Menschen を著す。
167. " J. de Morgan
北亞滿石文化を Capsien と設定す。
168. " H. Breuil, Hugo Obermaier,
スベイル Valle の洞窟研究を發表す。
169. Albrecht Penck und Eduard Brueckner
Alpen in Eiszeitalter を著し、洪積氷河を明にす。
170. 1910. バリ-にモナコ大公により化石人類研究所設立せられ、諸碩學を集む。
171. " O. Montelius
La civilisation primitive Italie を著す。
172. 1911. W. J. Sollas
Ancient Hunters を著す。
173. 1912. H. Obermaier
Der Mensch der Vorzeit を著す。
174. " R. R. Schmidt
Die diluvial Vorzeit Deutschlands を著す。
175. 1914. Henry Fairfield Osborn
Man of the old stone age を著す。

大 山 柏